



見えるものは？

君は何を見ているんだ？

大空を見ている。

君は何を見ているんだ？

大海を見ている。

君は何を見ているんだ？

宇宙の星を見ている？

君には何が見えるんだ？

僕は見たいと思ったもの全てが見えるのさ。

愛しい私

私の この肉体は空を飛ぶ力を持たない。

私の この肉体は宇宙に行ったことがない。

まして歴史の中の出来事も 未来を知ることなど叶わない。

それでも私の想像力だけは、肉体の限界を超越しているのだ。

その中では私は猛々しい獅子にもなれ 一筋の風にさえなることができる。

そこで私は誰でもないが 誰にでもなれる。

そんな私の想像力を大変 愛しく思う。

私の秋

サラリーマンが、つかれたような顔をして私とすれ違った。生気が無かった。

私も疲労困憊で早く家へと帰りたかった。

その時、唐突に私の頭上に乗っかって来たものがある。

指で摘まんでみる。落ち葉だ。

頭上を見上げてみる。楓だ。

いつの間にか季節は秋で、冬も近いと知った。

楓の葉っぱが色づいて染まり、落ち葉にさえなっている。

そのことに私は気がついた。そして、この楓の葉に気がつかなかったら秋を知ることができなかつた。ましてや、もう紅葉の季節だと知り得なかつた。

そしてまた思うのだ。

私が、楓が落ちて敷き詰められているようなこの景色に何か感じなかつたら、秋なんて紅葉なんて無いも同じだと。

秋は楓の葉が教えてくれた。その秋を感じることは私の心だ。

すれ違った、あの彼は足を止めて楓を眺めることも、自分が落ち葉を踏んだことにも無頓着であるらしかった。

その時、私は自分が人間の心を持つことに気がついた。

私は次の休みに紅葉を見に嵐山まで行こうと決めていた。